

〔庵丁聞書〕一鳴壺焼と云は、生茄子の上ニ枝にて鳴の頭の形を作りて置也、柚味噌にも用。〔大草殿より相傳之聞書〕一鳴のつぱいりのつばは、なすび本也、なすびをへうして木にてもひきてする、其時は金銀にみがき、ろく玄やうこん玄やうにて、いろべたるものにて候、なすびの時はなすびのまゝ、たるべく候、其時はみがくまじく候、なすびのつけもとふたになり候、いかにもみのりてこはくあるなすびをする也。

〔大草殿より相傳之聞書〕一鳴のつぱいり扱したの。○したの恐誤。是も本膳二三膳の中に参るべし、中より外にはかつてする事有間敷候、集養の様は、これもめしきこしめし候時は、集養なき事にて候、御銚子あがり一二へん参りたる時、左右の座中を見合て、右の手にて鳴のつぱいりの臺を取あげ、左の手にすへ、日まはりにまはし鳴の口と我とむきあふやうにして、又本のごとく取直し、右の手にて御おし、右の手にてつぱいりのふたに有花を取、左の手に持たる鳥をさげ、花をすこしがんずるやうして、我が右の方へ二の膳の前た、みにをき、其後左にもちたる臺を右にて取、是もこの二の膳のた、みにをき、扱又つばをとりおろし、鳥の右の羽がいを、つばのあたりにをき、鳥の足をひとつに取て、取たる羽がいのあとに、爪さきを我が前になして置、其後つばのふたを取、臺の右のふちにかけをくなり、其後鳴のみをつばより羽がいの上にうつし、つばを本のごとく臺にをき、花を右の手に取、つばの中には、又右にて臺をとりあげ、かんずる心もちして、左の手をつき、右の手にて本所へをくべく候、其後羽がいともに持あげ、左の手にすへ集養あるべく候、鳴の羽ぶじをうつむけ、鳴の臺の下にをく也。

〔瓦礫雜考〕鳴やき、たぬき汁

今之茄子の鳴やきといふものは、鳴壺焼といふことより轉れるなるべし、庵丁聞書に、鳴壺焼と